
小さな死神の初恋（改）

麻道 傾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな死神の初恋（改）

【Nコード】

N9173M

【作者名】

麻道 傾

【あらすじ】

死神は人間に死を告げる。

ある死神の少女がいた。

無慈悲で不可避な宣告を繰り返す日々の中で、少女はある青年のもとに降り立つ。少女は青年に死を宣告し、彼の『最後の一日』を監視する。

青年とふれ合う中で、少女は人の温もりを知り、戸惑い、そして。

頂いた感想をもとに書き直したものです。

起（前書き）

この小説は、以前、麻道が書いた短編小説「小さな死神の初恋」を書き直したものです。

おおまかな流れは変えないつもりですが、多少の設定変更もしてしまっただけの別作品になりつつあります。

起承転結の4部構成になっています。

では、どうぞ。

起

死神。この言葉からあなたは何を連想しますか。

身の丈ほどもある大きな鎌でしょうか。ぼろぼろに朽ちかけた黒い衣装でしょうか。それとも「死」そのものでしょうか。

思い描く死神の姿は人それぞれ。この世界には数え切れないほどの死神がいます。

なら、その中には実在する死神がいても何一つおかしいことはありません。

死神は実在します。

それは、あなたの心の中に。

それは、この世界のどこかに。

きっと。

朝。気持ちのいい朝だ。快晴。

嗅ぎ慣れたミルクの香りが鼻腔を刺激する。基本的に朝飯は当番制ではなくて、俺一人が担当している。ウチの子供たちは皆寝ぼすけなのだ。

何度も作るうちにすっかり慣れてしまった工程難なく終え、出来立てシチューを人数分だけ皿に盛り付けている時。

その時だった。

背後で誰かの足音がした。大方、腹をすかせたやんちゃ坊主がフライングして朝食を食べにでも来たのだろうと思って、振り返る。

「えっ？」

だが、そこにいたのは孤児院に住んでいる子供ではなく、見知ら

ぬ少女だった。

整った顔立ちと腰まで伸びた長い白髪。漆黒のワンピースを着ていて、それとは対称的に病的なほど白い肌、そしてスラリと伸びた細い手足。白黒映画の中の登場人物のように色のない少女は、唯一その瞳だけが、血のような紅色をしている。

少女はその不気味な瞳で俺を見上げると、ゆっくりと口を開く。

「あなたには、死んでもらうことになりました」

「なに？」

刹那、これからこの少女が自分を襲ってくるのかと思つて身構えるが、少女は武器の類を取り出すこともなく、静かにこちらを見つめて佇んでいるだけだ。

「……………」

「……………」

沈黙が場を支配する。しかし、このままでは無駄に時間を浪費するだけなので、まず根本的な質問を試みる。

「お前、どうしてここにいるの？ 孤児？」

「……………違います。私はあなたを監視するためにここにいます」

「はあ？ なんだそれ。イタズラ？」

少女は俺の言葉を聞き、ため息を漏らす。

「あなたがそう思うのなら、それは構いません。しかし、私はあなたに残された時間が少ないことを知っていて、それを伝えたいと思つているんです。聞くだけ聞いていてください」

「……………」

こんな年端のいかない少女に「死ぬ」とか「監視」とか言われたところでふざけているとしか思えない。

「説明してもいいですか？」

少女は無表情で俺を見つめて言うが、声色は不満そうだ。

「……………あ、ああ。いいんじゃないか？」

「よく聞いてください。あなたは今から一日後、正確には二十三時間と五十八分後に死にます。死因は確定していませんが、おそらく

心臓発作または事故死でしょう。そして私は、これからあなたが死ぬまでの間、監視をすることになった死神です」

正直なところ、意味不明だ。この少女が何を言いたいのかわからない。

「あのさ、質問いいか」

「なんですか」

「お前つて、ちょっと頭がイタイ子？」

少女はため息を吐いて、冷めた瞳で俺を見つめる。

「私の話を信じる信じないはあなたの自由です。しかしあなたが一日後に死ぬ、これだけは誰にも覆せない事実です」

「ああ、そう……」

紅色の瞳を見つめ返す。それでも少女の視線は揺らぐことなくこちらに向けられている。嘘をついている子供ならば、動揺して視線を逸らしたりするのだが、少女にはそういった反応がまったく見られない。

少女の話を信じたと言えば、嘘になる。だが、少女の声色も視線もこれ以上ないくらい真剣で、とても嘘や冗談で言っているように思えなかった。

信じたわけではない。完全に信じたわけでは、ない。

荒唐無稽な話だが、それを信じてしまった自分も、確かにいるのだ。理由なんて分からない。冗談だと跳ね除けて少女を落胆させたくなかった、なんて身勝手な理由なのかもしれないし、少女の外見が普通の人間のそれとはかけ離れているからなのかもしれない。

「人を信じることを覚えなさい」

不意に今は亡き父親の言葉が蘇る。

俺はこの少女の言うことを本当に信じるのか？

結論は出ないままだが、自分の寿命があと一日しかないというのは、俺の中では半ば確定事項のようなものになっていた。何故かは分からない。無意識のうちにあと一日で死ぬことを受け入れている自分がある……。

「大丈夫？」

少女の声に思考の海に沈んでいた意識を引き戻される。

「大丈夫だよ」

長年の癖で咄嗟に笑顔を作っただけで、孤児院の子供を預かっている自分が、子供を不安にさせるようなことをしてはいけないのだ。

「そう……ならいいけど」

少女は興味なさそうに呟いた。

「ところでさ。お前はこれから俺が死ぬまで、ずっと俺のそばにいるんだよな」

「うん」

事務的な口調が一変して子供っぽいものになっていたのでクスツと笑ってしまった。

「なによ？」

不機嫌そうな声。

「いや。なんでもないよ」

やはり少しだけ笑いながら返す。

「一緒にいるのが嫌なら遠くから見てるけど」
拗ねたように返された。

「いや、いい。俺が死ぬことに関してまだ訊きたいことがあるから。後で教えてくれ」

「今訊けばいいじゃない」

「そろそろ朝飯の時間なんだ。あんまり遅いと子供達に起こられるからな。お前も食うか？」

「いらない。死神は食べる必要がない」

「そうか。でも、上手そうな匂いで腹減ったなら言えよ。作ってるから」

俺の言葉に、少女は不機嫌そうに口をとがらせる。

「別に、お腹減らないからいい」

「台所には包丁とか危ないものがあるから、盗み食いしよっつて怪我するなよ」

言葉を聞き、少女の頬がほんのりと赤く染まる。

「盗み食いなんかしないもんっ！」

「ならいいけど」

そう言つて、皿を乗せたお盆を持つて台所を立ち去る。

ここまでからかつておけば、意地でも怪我をしないように努めてくれるだろう。意地悪が過ぎた気もするが、俺が嫌われて、女の子の綺麗な肌に傷がついてしまつ可能性を減らせるなら、それでいい。

青年はお盆に料理が入つた皿を乗せると、台所から出て行つた。

「バカ……」

小さく呟いた後、すーはーと深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

「よし」

顔の熱も引いたし、これで元通り。

それにしても、不思議な青年だった。今まで幾度となく死神として死の宣告をしてきたが、ここまであっさりと受け入れられたのは初めてだ。馬鹿なだけなのか、勘がいいのか、それとも裏では私のことを頭がおかしい子と思つて嘲笑つているのか。

説明するだけで彼の貴重な『最後の一日』の大半を浪費してしまふという事態は避けたかつた。青年の本心は分からないにしろ、その点だけで言えば、余計な手間が掛からなかつた現在の状況は好都合だ。

青年があつさりと自分の死を受け入れた理由は、もしかすると彼の父親が原因なのかもしれない。

口の中だけで小さく「ありがとう」と言葉を発し、今は亡き彼の父親に黙祷を捧げる。

……こんなことをしても意味などないのだが、それでも感謝をしておきたい。青年に、自身が納得できる『最後の一日』を送るチャンスを与えてくれたのだから。

青年はたくさんのもを父親から貰っている。こんな表現をするのはおかしいのかもしれないが、青年の二十年近くの人生も父親から貰ったもののひとつだ。

たとえ血縁関係がなくとも、青年の命は、当時は赤の他人であった彼の父親から与えられたものだ。義理だとしても、彼らは間違いなく本物の親子だった。

青年は生まれてすぐに捨てられた。捨て子だったのだ。

彼の血縁上の両親は金銭的な問題で彼を育てていくことができなかった。

本当なら青年の人生はそこで幕を下ろしているはずだった。だが、そうはならなかった。

牧師をしていた男が道端に捨てられていた彼を見つけて、引き取った。牧師の男が彼を見つけ、育てていこうと決意したのは半ば必然のことだったけれど、藪の下に隠すように捨てられていた赤ん坊を見つけれられたのは正真正銘の偶然だった。運命の悪戯に命を救われたのだ。

そうして彼は生き延び、牧師の男のもとで暮らすことになった。

牧師の男は、彼が言葉を解するようになると、まずふたつのことを教えた。

『人を信じることを覚えなさい。人と助け合うことを覚えなさい』

彼は毎日のようにその言葉を聞いて育った。

そして十年の月日が経つ。

その頃、彼らの住む地域は深刻な凶作が続いており、幼くして捨てられて命を落とす子供が後を絶たなかった。

心を痛めた牧師の男は孤児院の設立を決意した。しかし、牧師の男もひとりの力で孤児院を設立できるほど裕福だったわけではない。親子二人、地主や貴族などの財力がある様々な人に頭を下げて協力を頼み、やつとの思いで設立することができたのだ。

それからの日々は、彼ら親子にとって、忙しかったが充実した日々でもあった。牧師の男が子育てを経験しているとはいえ、男二人

で多くの子供たちの面倒を見るのが楽であるはずがない。

青年は自分と同じ境遇の子供たちを育てながら、自身もまた成長していった。

そして再び数年の月日が経った。

彼ら親子の習慣に「朝食は二人で用意する」というものがあつた。だがその日の朝、牧師の男は台所に姿を現さなかつた。不思議に思つた青年が牧師の男の部屋へ行つてみると、男は静かに息を引き取つていた。青年は急いで医者を呼んだが、すでに死んでしまつた人間が生き返るはずもなく、分かつたことは死因が不明ということだけだつた。

死んでいる男の枕元には青年に宛てた「孤児院を頼む」という旨の遺書があつた。

自身の死期を悟つていたことを考えると、牧師の男はおそらく「選ばれてしまつた」のだろう。青年が知る由もないことだが、自身が父親と同じ理由の最期を辿ることになつてしまつたのは、どういふ皮肉なのだろうか。

青年は父親の死を悲しんでいたが、子供たちの前で涙を流すことはなかつた。悲しんでいるのは彼だけではないのだ。育ての親である牧師の男の死を悲しんで泣いている孤児院の子供たちをあやし、泣き止ませるのに奮闘した。彼は子供たちが寝静まつた後、自室で声を殺して、泣いた。そして亡き父親に、孤児院は自分が守つていくと誓つた。

それから、彼はひとりで孤児院を支えてきた。もちろん、それに働くことのできる年になつた子供たちが手伝つこともあるが、ほとんどの仕事は彼が受け持つている。

彼は誓いを破らないために、そしてなによりも子供たちの笑顔のために、懸命に孤児院を切り盛りしている。

それが今の彼をつくるモノのすべて。

本来、死神が監視対象に関する情報を知る必要はない。

死神は監視すること 監視対象が期限より早く死んだり、自棄

になつて運命を変えてしまわないようにすることのみを求められている。

だけど、と思う。

監視対象たちにもそれなりの人生があつたはずだ。ならば彼・彼女らには相応しい死の形があるのではないのか。私たち死神はただ監視するだけでなく、それぞれに相応しい死を与えるべきなのではないのか。

もちろん、私たち自身が直接死を与えたり、最期の時間をどう過ごすのかについて助言を与えることはお門違いもいいところだ。

それでも私は監視対象の人生を知ろうとしてきた。たとえ努力が報われることがなかつたとしても、だ。

人間の感情で言う自己満足を私は感じているのかもしれない。

『私は努力した、結果は伴わなかつたけれど、私は頑張つた。その頑張りは認められるものでしょう？』

そう言いたいのかもしれない。誰かに認められたいのかもしれない。

けれどそんな感情は持たないほうがいい。人間の世界は知らないが、死神の世界では結果だけに意味がある。ならば過程を重視するような私の考え方は虚しいだけだ。

虚しいだけ。虚しいだけのはずなのに……。

私はやっぱり監視対象の人生を知ろうとしてしまう。

そして青年が死ぬことに理不尽を感じてしまう。そんな感情、死神には用意されていないはずなのに。

……私は狂っているのだろうか。

頭を振って気持ちを切り替える。今は監視の仕事だ。青年のとだけを考えていればいい。私は青年が死ぬまでの間、青年を監視していればいい。彼が一日後に死ぬという運命が変わってしまったわけでもない。

耳を澄ますと、楽しそうな喧騒が聞こえてくる。

青年はどんな死を望んでいるのだろうか。

承

もしかすると、あれが最後の朝食だったのかもしれない。

それでも朝食はいつも通りに楽しく終わった、終わってしまった……。

そんなことを考えながら、空になった皿をお盆の上にまとめて持って、台所へ向かって廊下を歩く。

台所に入ると、色のない少女の姿が視界に入ってくる。死神と名乗ったその少女は、脇に置いてある背もたれのない小さなイスに座って、目を閉じている。

その外見はとても普通の人間には見えない。人種や育った環境によつて変わるものであるうが、この年で完璧な白髪を持っていることには違和感がある。それに、紅色の瞳というもの初めて見る。

だが、特異な外見だったとしても、それがそのまま少女が死神だという証明になるわけではない。

少女の肩が規則的な呼吸と共に小さく上下している。眠っているのかもしれない。

この仕草だけを見ていると、少女が死神であるとは到底思えない。孤児院に新しく迎えられた子供だと言うほうがよっぽど信じられる。

運んできた皿を流し台に置いて、少女へと向く。

こんなところで眠らせておくよりも、どこかの空き部屋に運んでベッドに寝かせてあげるべきだろう。

そう思つて、少女に近づいて手を伸ばす。しかし、手が身体に触れる直前、閉じていた目蓋がパツと上がった。警戒心をあらわにした視線でこちらを睨む。

「何するつもり？」

「いや、眠っているならベッドに運ぼうと思つたんだが、必要なつたな」

「そう……」

少女の身体の強張りが解ける。警戒の色が消えでも少女の瞳は俺を見つめたまま。

「死神は仕事中に眠ることはないんだよ。それに スツと眼が細められる。」

「あなたには死神の私を気遣っている時間なんて、ない。二十三時間二十七分。それだけの時間しか残されていないんだよ」

「……………」

何も言えなくなってしまう。

少女の瞳は依然細められたまま、こちらに視線を注いでいる。俺の心が見透かされているような気さえしてくるから不思議だ。

同年代の少女とそれほど変わらない仕草や言動もするのにな、今のように見た目に不相応な冷たい表情をするから、やっぱり普通の少女には思えない。

……………信じてしまう。少女が死神だと、自分があと一日で死ぬのだと、信じてしまう。

「ねえ、聞いてる？ 時間がないって私言ったよ」

動こうとしない俺に痺れを切らしたのか、少女が不満げな口調で言う。

「私に訊きたいこともあるんじゃないの？」

「ああ、ある。けど、ちょっと待っててくれ」

その話をここでするわけにはいかない。

少女のそばを離れて、朝食に使った鍋や皿を洗い始める。洗い物を終わらせるのが先だ。

「洗いながらも話すればいいんじゃないの？」

「え？ 何て言った？」

少女が話しかけてきたことは分かったが、肝心の内容は水の音に掻き消されて聞こえなかった。

「だから！」

少女は立ち上がり、俺に寄って来る。

「だから！ 洗いながらも話をすればいいんじゃないの！」

少女が怒って不機嫌そうにしている顔が、死神ではなくて普通の子供のように見える。先程までの冷たい表情をしていた少女と同一人物とは思えない。

そんな姿が可愛くて、ついつい頬が緩む。

「なんでニヤニヤしてるのよ」

「ん？ お前が可愛いなって思ったただけけど」

少女が静止する。それも束の間、言葉の意味を理解した少女の頬が上気して、だんだん赤くなっていく。

「な、なななに言ってるのよ、あんた」

そこにいる少女は、もはや”色のない少女”ではなくなっていた。

「いや。そうやって恥ずかしがる所も可愛いなって」

「か、可愛くなんかない！ 私は死神なのよ！」

怒って俺を見上げるが、死神としての威厳なんてゼロだ。冷たい表情は何処へ行ったのだろうか。

それがおかしくて、笑ってしまう。

「なんで笑うのよ。あんたなんて……あんたなんてさっさと死んじやえ！」

少女は走って先程まで使っていたイスに戻り、座りなおして、俺を睨んでくる。

微笑ましくなる視線を背中に受けながら、洗い物を続ける。

「俺が死ぬ、なんて話を子供たちに聞かれるわけにはいかないだろう？」

小さく呟く。

声は水の音に掻き消されて、誰にも届くことはない。

なんなのよ、なんなのよ、なんなのよ！

心の中で叫ぶ。

私は死神なのに、なのになのに、なのになのに、どのようにして私に可愛いなん

て……

思い出して、また顔がカアツと熱くなるのを感じる。

動揺しすぎだと自分でも思う。

でも死神である以上、好意を向けられることなんて滅多にない。死を告げにくる存在に向けるのは悪意と決まってるのだ。

今まで何百人何千人の人間を監視してきたけれど、可愛いなんて言われたことは一度もなかった。これが初めてだった。

私たち死神が死を告げた後の人間の反応は大きく分けて三種類ある。畏怖や恐怖の視線を向けるか、気味悪がって避けるか、鬱陶しそうにして無視するか、だ。

一つ目は私たちの言葉を信じた者の反応。これらの視線の本質は、最期まで変わることはない。あとのふたつは、信じなかった者の反応。最期には私たちが恨むようなものになる。

死神に向けられる感情は、基本的にどれも少なからず悪意に順ずるもの含んでいる。好意を向ける機会などありはしないのだ。

悪意を向けられるのが当然。

死神である以上仕方のないことだと割り切ってやってきた。ずっとずっと、長い間。

だが、青年はたった一言で、私が長い間信じてきたものを覆した。可愛いと言われて、嬉しくないと言えば嘘になる。だけど困惑もあった。心のどこかで『ありえないことだ』と否定している私がいる。

どうして青年は私のことを可愛いと言ったのだろうか。

青年の真意が分からない。何か裏があるのだろうか？

私をおだてれば助かると思っている？ それとも私のことを信じていなくて、ただの子供だと思っている？

分からない、分からない、分からない！

人間の真意を知りたいと思ったのは今回が初めてだった。今までこんなことなかった。人間が何を考えていようと、仕事にも目的にも差し支えないからだ。

だけど今回は違う。……なんで？

青年の考えていることが分からなくて不安になっている。

どうして私は不安なの？ 分からない。分からないけれど不安で。

もし青年が言っていることが嘘だったら、裏があったら……私

は、私は……？

私はどうするんだろう？

何もしない？ そうだ、何もする必要はない。してはならない。

死神は監視対象が時間通りに死ぬ運命を変えないためだけにいる。

死神である私が監視対象の未来を大きく変えてしまうような行動をしてはならない。

だから、そう、このままでいい。……このままでいい、はずだ。

それなのに、どうして私は不安になっているのだろう？

もし、青年が嘘であんなことを言ったのであれば、私は……

「どうした？」

突然、青年に話しかけられた。

「な、なに？」

驚いて、声が裏返ってしまう。

「いや、どうしたのかって聞いてるだけだけど」

「別に、なんでもない」

「そうか？ だってお前、怒って俺を睨んでると思ったら、いつの間にか青白い顔で何か考えてるし、かと思えば俺に話しかけられて拳動不審になってるし」

「なんでもない！」

青年を睨む。

「そう、ならいいんだけどさ」

青年は困った顔で苦笑していた。それがなんとなく悔しくて、強引に話題転換をする。

「話があるんじゃないの？」

「あるけど、それは後で。場所を変えてからにしてくれ」

そう言って台所の出口の方を向くと、青年はゆっくりとした足取

りで出て行く。私はそれをイスに座ったまま見送る。

そのまましばらく待っていると、青年が走って戻ってきた。

「ったく、お前も来るんだよ」

優しい声で言ってから私の手を取り、歩き出す。

手を握られたのもこれが初めてだった。

「後で、って自分で言ってたじゃない」

照れを隠すために、小さな声で反論する。青年の言葉を勘違いしてしまったことに対する八つ当たりでもあるが。

「なに？」

「なんでもない！」

青年から顔をそらす。赤くなっている顔を見られるのは悔しかったから。

転

少女を連れて自室に入り、扉の鍵を閉める。

「あのさ。そろそろ手、放してくれない？」

「……………」

少女の返事はない。顔を俯かせてしまっているので表情はうかがえないが、白い髪の毛の奥に垣間見える耳は真っ赤に染まっている。

こちらは手に力を入れていないが、少女は俺の手をギュッと握っていて、放してくれそうにない。

仕方がないので少女に手を握られたまま、部屋の隅に置いてあるイスを持ち出してきてベッドの横に置く。

「座ったら？」

少女は躊躇った後、小さく頷いて用意したイスにちよこんと腰を下ろした。ただし、握ったままの手を放してくれることはない。

俺も、ちょうど少女と向き合える位置でベッドに座る。

「手、放し」

「いや」

少女は俯いたまま、俺の言葉を遮る。

思わずため息を吐いてしまう。

ビクツと、繋いだ手から震えが伝わってきた。ため息で不安にさせてしまったのだろうか。……そもそも、何故こんなことになっているんだ？

「どうして俺の手を放してくれないのかな？」

これ以上少女を不安にさせないように、優しい声になるように努めて、訊いてみる。

少女は無言で何かを考えているようだったが、やがて小さく口を開く。

「質問に答えてくれるなら放しても、いい」

「分かった。答えるよ」

少女の言葉は質問に対する回答になっていなかったが、それで少女の気が済むのなら、いいだろう。

「私に可愛いって言ったの、どうして？」

少女は顔を上げて、紅色の瞳で俺を見つめる。

「どうしてって言われてもなあ。単純に可愛いと思ったから言っただけなんだけど」

「……答えになってない。真剣に答えて」

もしかして、可愛いと思った理由を説明してほしいのだろうか。

正直に言えば少女は怒るかもしれない。それでも少女の瞳は真剣で、だから俺は。

「孤児院にいる子供たちと同じように見えたんだ」

「え？」

少女の眼が見開かれる。

「お前が、さ。普通の子供に見えて、死神に見えなくて。孤児院の子供がまた一人増えたみたいな、そんな気持ちだった」

「……そう」

少女は約束通りに手を放してくれるが、視線は名残惜しそうに俺の手に向けられている。少しの罪悪感がちくちくと胸を刺す。

「あなた、変だよ」

「なにが？」

少女の視線は俺の手から上がっていき、眼へ。

「だって、あと一日したら死ぬのに、自分のことじゃなくて孤児院のこと考えてる」

「そう、だな……」

「そんなに父親に誓ったことが大切？」

「……」

驚きで声すら出ない。

なぜこの少女がそのことを知っている？ 偶然か、それとも、やはり……。

「この場所は、本当にあなた一人で守らなければいけない場所なの

？ あなたの『最後の一日』を犠牲にしてまで守るべき価値のある場所なの？」

決定打だった。

誰かがそのことを知っているはずがない。俺が死んだ父親に誓ったことなんて、ずっと近くにいた子供たちですら知らないのだ。会って数時間した経っていない少女が知っているはずがないのだ。ありえない。

誰一人知っていてはならないのだ。知っているとするれば、それはもやもやとした疑問は、あっけなく吹き飛ばされて確信だけが残る。

『ああ、この少女は死神なんだ』と。そして『俺はもうすぐ死ぬんだ』と。

しかし、理解するのと受け入れるのは違う。あつさりと死を受け入れるなんてこと、俺にはできない。

「……なあ、本当に俺は死ぬのか？」

返答は分かっていたが、そう訊かすにはいられなかった。

「あなたは死ぬ。信じるも信じないも自由だけど、誰にも変えられない事実なの」

今までは半信半疑だった。だからその言葉が意味するものを想像することを避けていたのだろう。けれど今は 怖い。子供たちを残して自分が死んでしまうことが、怖い。

「……ここは、俺の全てなんだ。命よりも大切な場所なんだ」

無意識のうちに、俺は呟いていた。

「それでも、あなたはもう死ぬ」

残酷な宣告。

「俺なしで、子供たちはちゃんとやっていけるのか？ 仕事はほとんど俺がやってるんだ。俺はまだ死ねない。まだ死ねないんだよ…」

…」

少女は沈痛そうな面持ちで俺から眼を逸らす。

「それでも、あなたは死ぬ」

「なあ、どうにかして」

「無理」

どうにかして死なずに済む方法はないか。そう訊こうとした。

「あなたは絶対に死ぬ」

けれど先回りされて、否定された。

「みんな聞くの。『どうやってたら生きられる。死なない方法はないか』って。私は監視するだけで、あなたたちに手を下すわけじゃない。だから私に言っても無駄なの」

答えはなんとなく予想がついていた。だから思ったよりショックは少ない。……けれど、俺が死ぬことは変わらない。

少女は自嘲的な笑みを浮かべて天井を仰いだ。

「結局ね、私たちは見てるだけなのよ。死神なんて大層な名前と呼ばれてるけど、死を司っているわけじゃないし、まして神のような力もない。死神は誰も救えないのよ」

少女は悲しそうに微笑んだ。涙は流れていなかったが、俺には泣いているように見えた。

「あなたを救うことは誰にもできない。だからあなたは考えなきゃいけない。残された時間で何をすべきなのか、何をしたいのか」

「後悔しないように過ごせって？」

「……違う」

聞き逃してしまいそうなくらい小さな呟き。

「そんなこと、後悔しないように過ごすことなんてできない。……私は何百人、何千人の『最後の一日』を見てきた。だけど誰一人、後悔しないで死んだ人なんていなかった。あなたも絶対に後悔することになる」

少女は俯いてしまう。

俺も俯いて、自分の両手を眺める。

俺には何ができる？ あと一日。限られた時間で。この身体で。

俺は……子供たちに何をしてやれる？

顔を上げると青年は俯いて、じつと自分の両手を眺めていた。

考えているのだろう、それは必要なことだ。けれどその間も刻一刻と、死は青年に迫っている。私は悩ませるために青年に死を告げたんじゃない。行動しなければ、後悔だけが募った終わりになってしまう。そんなのは嫌だ。

彼には、彼に相応しい死の形があるはず。だから、彼らしい『最後の一日』を送ってほしいと願っている。

『私は、道標になる』
ずつと昔にそう決めた。

人間は、人生という道を歩いているのだ。道は数多に分岐して無限に続いている。それが人間は無限の可能性を持っていると言われる由縁だ。

けれど人間は寿命に縛られている。進める歩数は決められているから、行ける範囲だって制限されている。

青年にもう歩数は残されていない。可能性なんてほとんど残されていないのだ。

道標は行くべき道を指し示すことはできない。ただ、道の先になが待っているかを告げる。私はすぐ先に終わりがあることを告げるのだ。

私たち死神は監視することを求められているけれど、干渉することを禁止されているわけではない。指定された時刻に監視対象が死ぬ運命を変えることさえなければ、どんな干渉をすることも黙認される。結果がすべてなのだ。過程に意味はない。過程を評価されることはない。

だから青年が死に至る過程を変えてしまったとしても、それは黙認されるし、誰にも文句を言われる筋合いはない。

私は干渉する。干渉しなかったために後悔だけが残るなんて経験

は二度としたくない。同じ後悔をするなら、干渉して後悔することを選ぶ。

残酷な宣告になってしまっけれど、私は残された可能性を提示することができるのだ。

恨まれたって構わない。傷つけられたって構わない。死神はもともそういう仕事だ。私が犠牲になることで、監視対象が納得できる最期を迎えられるなら、それはすばらしいことだと信じている。

だから、今回だって。

「後悔せずに死んでいった人はいないけど、自分の『最後の一日』に納得して死んでいった人なら、いる」

私は唐突に言葉を発した。

「え？」

青年が顔を上げて、不思議そうな目で私を見る。

「人間は後悔する生き物だけど、納得する生き物でもあるの。あなたが死ぬとき、あなた自身が納得できる『最後の一日』にしてほしい。私に誇ることが出来るような『最後の一日』にしてほしい。もう『最後の一日』は始まっているの。だから考えてばかりじゃ、ダメ」

青年は私の言葉を受け取ると、少しの間、目を閉じて思索する。

……私の言葉は、青年を彼の望む最期へと導けるのだろうか。私は青年の道標になれるのだろうか。

「よし」

青年はそう言うと、立ち上がる。

じつと様子をつかがっていた私に笑顔を向けると、部屋の端に置かれていた小さな机に向かい、セツトになっているイスに腰掛けると、手紙を書き始めた。おそらく孤児院の子供たちに向けた手紙だろう。

私はその後姿を黙って見つめていた。

やがて手紙を書き終わると、青年は立ち上がり、私のところに歩いてくる。

「なに？」

そっけなく訊く。

「……………」

しかし青年は返答せず、おもむろに手を伸ばして私の頭の上に置く。

クシャッと撫でられた。

「な、なな、なにすんのよ!」

睨み上げる。

自分の顔が熱くなるのが分かる。多分、真つ赤な顔をしているだろう。

そんな私を見て、青年は笑顔になって言った。

「子供たちと遊んでくる」

再びクシャクシャと私の髪を撫でると、青年は部屋を出て行った。

また、初めてだ。

初めて頭を撫でられた。

それは不思議な感覚だった。撫でられるということが恥ずかしくて、顔が熱くなって、嫌なはずなのに、不快な気持ちにはならなかった。髪をクシャクシャにされるのは嫌だけど、もつと撫でてほしかった。ずっと撫でていてほしかった。その手は温かくて、それは死神には存在しない温もりで、感じているだけで安心できた。

青年は孤児院の子供たちと過ごすことを選択したのに、私は青年にそばにいてほしかった。それが青年に相応しい最期を阻害するものであるかもしれないのに、私は望んでしまった。

どうしてだろう? どうして私は青年に依存しそうになっているのだろうか?

少し考えて、結論は簡単に出る。

今まで接してきた人間の中で、青年は唯一、私が死神であることを認めた上で好意を向けてくれた人間だからだ。私をただの少女だと考え、呆れた視線を向けた人間はたくさんいた。私が死神だと分かった途端、怯えた視線を向けた人間もたくさんいた。だけど、私

が死神だと理解して、それでも普通の少女にするように接してくれたことが嬉しかった。

イスから立ち上がり、窓まで歩く。外を見ると、庭には子供たちとサッカーをする青年の姿があつた。

これが私の望んでいたことだ。青年の居場所は私の隣じゃない。子供たちに囲まれていたのがあるべき姿。これで良かったんだ。

楽しそうに笑う青年と子供たちを見て 胸がチクリと痛んだ。

窓の外の光景から目を背ける。すると、青年の書いていた手紙が視界に入った。その手紙は封筒に入れられるわけでもなく文章がむき出しになつたまま、机の上に置かれている。

褒められたことではないのは分かっているが、つい手紙の内容を見てしまう。

『旅に出ます』

一行目にそう書いてあつた。

それは、子供達に囲まれて死ぬことを拒絶するという意味だ。青年は人生の最期を子供たちに見られないこと、そして死んだことを知られないことを望んでいる。

『いつ帰ることになるかは分からないけど、俺がいない間はみんなで支えあつて暮らしてくれ』

『くれぐれも俺が帰ってきたときに孤児院がなくなつてたなんてことがないように』

そこから後は孤児院の子供一人ひとりに対して別れの言葉が述べられていた。

青年の選択が正しいものかどうかなんて私には分からない。

子供たちにとって、目の前で青年が死ぬことと、いつ帰ってくるか分からない青年に淡い期待を抱き続けるのと、どちらが幸せなのだろうか。

けれどどちらにしても私がその選択に口を挟むことは出来ない。

私は選択の結果を見届けるだけだ。

青年は誰も悲しませないために、誰にも知られずに死んでいくこ

とを望んだ。孤独な最期を遂げるだろう。それはきつと、とても悲しいことだ。

私たちが監視した人間は例外なく死ぬ。

私が監視してきた人間も皆死んだ。皆、後悔しながら死んでいった。苦しみながら死んでいった者もいる。悲しみながら死んでいった者もいる。その中で一番見ていて辛いのが孤独に死を迎える者だ。彼・彼女らは迫りくる死に怯え、恐怖するが、周りに縋る者はいない。震える自分を見つめる死神の私だけがそばにいる。そんな状況で涙しながら死ぬ。

そして、確かに自分は生きてきてその場所で終わりを迎えた、そんな事実さえ誰の目にも映らず、誰かが悲しむこともなく、ひっそりとその存在自体が消えていく。生きていたという証拠すら曖昧になっってしまう。

青年だつて同じだ。きつと悲しい最期になる。

それでも青年が孤独を望むというのなら、私は少しでもその孤独が紛れるように、そばにいよう。

結

一日というのは長いようで短い。

それは人生最後の一日でもあまり変わらないようだ。気づけば夜になっていて、夕食も食べ終わり、子供たちも遊び疲れて眠ってしまった。

もう二度と子供たちと会うことは叶わない。そのことを考えると、さっきまではなんともなかった目頭が少しだけ熱くなる。

……後悔したって仕方ない。

決めたじゃないか、自分で。俺は子供たちの前では死なないと。子供たちを悲しませないためにも、俺は消えるんだ。消えて、永遠にこの場所からいなくなる。

自分の部屋の前に立つ。当たり前だが、長い間使ってきたこの部屋ともこれでお別れだ。

ノックをしてから扉を開けて入ると

そこには月明かりに照らされた少女がいる。

暗い窓の外を見つめる死神の少女は、窓から入ってくる微かな月明かりで光っているように見えて、その幻想的な光景に一瞬、これは夢なのではないかと疑ってしまう。

少女が振り返る。影に隠れて表情はよく見えないが、闇に浮かぶ紅色の瞳はこちらに優しい視線を向けている。

「なあ、俺の『最後の一日』はお前に誇れるものだったか？」

少女は俺に向けていた視線を逸らした。

「子供達は幸せそうだった……けど……」

視線は遠慮がちにもう一度俺に向けられる。

「後悔、してるでしょ」

「ああ。やっぱダメだった」

雰囲気は暗くならないように努める。できるだけ笑顔と共に続ける。

「後悔しないように過ごしたつもりだったんだがなあ。……………」
今も、すごく後悔してる」

「……………」

少女は顔を伏せて悲しそうに呟いた。

「だからってわけじゃないんだけどさ。俺、旅に出ることにしたんだ」

「子供、悲しませないために？」

「手紙読んだのか」

「……………」

俯いたままの、バツが悪そうな謝罪。

俺はそんな少女に近づいていくと、その小さな頭にポンと手を置く。

「いいよ。むき出しにしたままだった俺がいけないんだし」……………」
れにお前に読んでもらいたかったのかも知れない。

少女への想いは言葉にはならず胸の内で反響するだけだった。

誰でもいいから俺の決意を知っていてほしい。誰でもいいから俺
がどんな気持ちを抱いて死んでいったのか知っていてほしい。

「誰でもいい」なんて、そんな一方通行の欲望は誰かにぶつけるべ
きじゃないんだ。だから、そう。……………」

少女はいつの間にか顔を上げて俺を見つめていた。頭に置かれた
手をどけようとはせず、心配そうな眼をしている。

『心配させてはいけない』

そんな長年の癖は俺に笑顔を強制する。表情の切り替えと共に、
沈んでいた気分も切り替えて、先程の少女の疑問に答える。

「旅に出るのはさ、子供たちを悲しませないためってのもそうだけ
ど、もうひとつ理由があるんだ。人生の最後に、海から昇る朝日っ
てやつを見たいって。そう思ったんだ。たった半日にも満たない旅
になるけどさ」

言い終わると頭に置いた手を優しく動かして撫でる。少女の悲し
そうな表情が少しだけ和らいだような気がする。

「間に合うの？」

「いまだ心配そうな声色で訊いてくる。」

「今から出れば、多分空が白んでくる頃には着けると思う」「
応える声は明るく、その不安を払拭できるように。」

「分かった。ついて行く」

「じゃあ行くか」

「うん！」

少女は頭の上に乗せたれた俺の手を取るとギョツと握って恥ずかしそうに微笑した。それを見ていると俺も自然と頬が緩んでしまう。この少女と最期の時間を過ごすのも悪くはない。そう思った。

子供たちを起こさないように、静かに孤児院の裏口から抜け出して、停めてあった荷台付きの自転車にまたがる。

「後ろ、乗れよ」

少女に声をかける。

「……………」

しかし、返事はない。

「言つとくが自転車を二台も持ち出す気はないぞ」

横でもじもじしていて、動こうとしない少女を見下ろす。

「……………分かった」

視線を俺に向けず俯いたまま不満げに返事をすると、少女は恐る恐るといった様子で荷台に乗って、俺の腰に手を回す。腕が触れた瞬間にビクツと震えたが、それもすぐに解決したようで手に力を入れてしつかりとしがみついでくれる。

そんな少女が可愛くて、悪戯をしたくなってしまった。

「こうしていると恋人みたいだな、俺ら」

「バ、バカッ。恋人つてなによ。私は死神なのよ！」

予想通りに反応を返す少女が微笑ましい。

「俺は死神と恋人でも構わないけどな」

笑いながら言う。

「うっう〜。バカッ。あんたなんてさっさと死んじゃえ！」

少女が両手でポカポカと背中を叩く。

朝も『死んじゃえ』って言われたけれどその言葉は意外と洒落にならないんだよな、と口には出さず内心だけで苦笑しておく。

「無駄口ばかりしていると、朝日見れなくなちゃうから、さっさと出るの！」

「へーい」

少女が腰に手を回し直したのを確認すると、俺はゆっくりと自転車をこぎだす。

裏庭から続く建物の壁と花壇に挟まれた狭い道を進んで孤児院の表に出る。そこから門を通って道に出ると、あとは人気のない田舎道を海まで延々と走るだけだ。

初めからペースを上げすぎて途中で体力が尽きてしまわないためにも、一定のスピードを心がけてゆっくり着々と走っていく。これなら速くて少女を怖がらせてしまうこともないだろう。時間にも多少の余裕はあるはずだ。

しばらくはお互いに何も話さずに走っていたが、無言の空間に飽きてしまったのか、少女がおもむろに口を開いた。

「ねえ、あなたは幸せだった？」

抽象的な質問に、どう答えればいいのか迷ってしまう。

「いきなりそんなこと訊かれてもな。よく分からないな。お前はどっと思うんだ？」

「私には答えられないよ。……だって何が幸せなのかは人それぞれで違うんだよ。牧師のお父さんに拾われて、育てられて、一緒に孤児院を作って、孤児の子供たちを育てる側になって、お父さんが死んじゃってもひとりを抱え込んで、もうすぐ死ぬ」

自身の人生を見た目年下の少女に把握されているというのにはさすがに驚いたが、それがまた少女が死神だという確信を強固なものにする。

「私に言えるのはこれくらい。あなたの人生がどんなものか分かっ

ていても、あなたが幸せかどうかなんて分からないの。実の親に捨てられたから不幸？ 育ての親を若いうちになくしたから不幸？ 短い人生だから不幸？ 傍から見れば、あなたの人生はお世辞にも幸せなものだったなんて言えない。けど、本当に不幸なだけだったの？ 幸せかどうかなんて結局はあなた次第なの」

「そう、か」

ペダルをこぎながら思い出す。真っ先に浮かぶのは孤児院の子供たちの笑顔。

俺の人生は不幸だったのか？ 誰からも同情されてしまうような人生だったか？

「あなたが幸せと言えば、それは幸せな人生になるし、不幸と言えば不幸な人生になるの」

「……俺は、きっと幸せだった。他人から見れば不幸な人生だったのかも知れないけど、俺は間違いなく幸せだったんだと、思う」

少女は俺の回答を聞いても何も言わず、ただ俺につかまる手の力を強めて身体を押し付けてくる。

「どうした。寒いか？」

「……違うの」

少女はギョツとしがみついたまま、か細い声で続ける。

「ごめんね……ごめんね……」

「いきなり謝ってどうしたんだよ」

「だって、あなたは幸せだったのに。それなのに……」

「可哀想か？」

声に反応してビクツと少女の身体が揺れる。

「……可哀想、なのかな。よく分からない。けど、あなたは選ばれただけなのに」

「選ばれたって？」

好奇心と恐怖がごちゃ混ぜになったような名状しがたい感情が胸の内に渦巻く。

「死ぬ人間が無作為に選ばれるの、世界のバランスを整えるために選ばれた人間が偶々あなただった。たったそれだけの理由であなたは死ぬの」

「……………」

渦巻く感情に怒りがトツピングされてどす黒く染まる。なんなのだろう、この感情は。鈍くて、重くて、粘ついて、侵食して、俺を穢す。怒りは矛先を形成する前にドロドロになって崩れ落ちて、渦に回歸する。感情の捌け口が用意されることもなく、だから誰かが傷つくことはなく、俺だけが削り取られて黒く染め上げられる。

「ごめんね」

「……………なんでお前が謝るんだよ。俺を選んだのはお前じゃないんだろっ?」

「そうだけど、でもあなたに謝れるのは私しかないから。あなたが恨めるのも、私しかないから」

「よく分かんないな」

俺の中に黒い渦は誰かを恨みたいという感情ではない。矛先が誰かに向けられることもなく、ただそこにあるだけのはずなのに。

それなのに、少女の言葉を聞いた黒い渦はまるで意思を持ったかのように俺の中を這い回って、やがて背中からそこに触れている少女の身体を犯していくような気がする。

全身に悪寒が走る。思わず身体を震わせた。

「どうしたの?」

少女が心配そうに訊いてくる。

「いや、なんでもない」

言って誤魔化そうとするが、右腕だけが痙攣したように小刻みに震え続けている。しがみついている少女にはそれが伝わってしまうのだろう。

「でも、だつて震えて……………」

一度息を大きく吸って、吐く。腕に力を込めてハンドルを強く握ると、震えが止まった。

「怖いのか？」

震えの直接の原因ではないが、恐怖がその一端になっていることは確かなので、間違いに便乗して誤魔化すことにする。

「ああ、怖いのかも知れない。死んだら自分がどうなるのか、とかさ」

「天国か地獄か？」

少女の確認するような声。

「そうそう。天国に行けるのか、地獄に堕ちるのか」

「あなたも天国に行きたいって思うの？」

「うーん。微妙かな。天国があれば行きたいって思うけど、正直なところ、あるとは信じてないから」

「……そう」

「で、本当のところはどうなの？」

「天国や地獄なんて存在しないよ。死んだらそこで終わり。魂なんてないの。だから死ねば全部終わり。あなたという人間は永遠に消える」

少女は迷いのない声ですらすらと言葉を並べていく。きつと同じ質問を何度も受けたことがあるのだろう。

「……なかなか重い事実だな」

天国や地獄を信じていたわけではないが、実際に聞かされるとそれにショックがある。死んだとしてもそれが完全な終わりではないと、心のどこかで信じたかったからだろうか。

ふと疑問が過ぎった。どうしてこの少女は俺の質問に親切に答えてくれるのだろう、と。

「なあ」

「なに？」

少女は俺を見上げて返事をしたのか、息が首筋に当たってくすぐったい。

「お前ってさ、どうしてこんなことしてるの？」

「こんなことって？」

「俺を監視するだけなら、俺に死ぬって事実を伝える必要はないし、俺の質問に答える必要もないはずだろ？ それとも、そういう規則なのか？」

「それは……………」

少女はそう言ったきり、言葉を紡ぐことはなかった。

規則なんかじゃない。

どうしてか口は動いてくれず、想いは音にならなかった。

青年が言った通り、私は質問に答える義務はないし、青年に死を納得させる必要もない。死ぬことを伝える必要もあるにはあるが、説明する必要はない。ただ仄めかすだけで十分なのだ。

言つなれば、私たちは手紙のようなものだ。一方的に死を伝えればいい。その後は一日だけ、予想外の事態が起きないように監視する”保険”になる。

けれど私は、監視対象にそれぞれに相応しい死を迎えてほしい。信じてもらえなければそれまでだが、信じてくれれば納得できる『最後の一日』を過ごす努力をしてくれる。

だから私は今回も死ぬことを説明して、青年はそんな私のことを信じてくれた。

青年は自身が納得できる『最後の一日』を過ごしている。それはすごく嬉しい。

そして青年は自分に相応しい『終わり方』を決めて、そこへ向かっている。孤独死を遂げようとしている。それは本当に青年に相応しい『終わり方』なのだろうか？ 青年は子供たちに囲まれて死を迎えるべきではないのか。

私が事実を伝えてしまったせいで、青年に相応しい死を阻害しているのではないのか？

不安が身体を駆け巡る。

思わず、青年の腰に回した手に入れる力を強めた。青年の大きな背中に身体を押し付ける。……温かい。その熱は私の中で暴れまわる不安を消し去ってくれていくようで、安心できた。

ずっとこのままでいたかった。ずっと、私は青年と一緒に……
けれど。

「着いたぞ」

そんな都合のいい幻想を抱いてはいけない。

青年の声は私を引き戻す。私は死神で、青年はもう死ぬ。いつだって現実残酷なのだ。だからこんな気持ちに気づいちゃいけない。理解してしまつたら辛くなるだけ。

「うん」

青年から手を放して、自転車を降りる。そこは砂浜だった。

「なあ。あとのくらいで日が昇るのか分かるか？」

「分かんない」

死神の体内時計は、仕事の終わりに
監視対象の死だけを感じ取る。太陽の動向なんて分からない。

「だよなあ」

予定よりも早くついでにしまつたらしく空はまだ白んでおらず、辺りは暗い。

「仕方ない、待つか」

そう言うと青年は砂浜に腰を下ろしてあぐらをかく。

「お前も座らないのか？」

「いい。服が汚れるから」

「そうか。それなら」

青年は隣で立っていた私の手を掴むと、引っ張って、組んだ脚の上に乗らせた。

「な、なな、なっ！」

「そんな驚くことでもないだろ？ それにこれなら服が汚れること
もないし」

「そ、それはそうだけど……」

「なら問題ないな」

そう言って笑う。青年の息が髪を揺らして、くすぐったかった。

青年の右手は私の手を握りっぱなしで、私を抱きしめるように身体に回されていて。それが温かくて、安心できて、失いたくなくて悲しい。

だって、分かっちゃいませう。死が、青年の死が本当にすぐそこまで来ていることが私には分かる。

だからかも知れない。私の口は意思に反して言葉を紡いでいた。

「ねえ。撫でて」

「撫でる？」

「……私の頭、撫でて」

「……」

青年は無言で左手を私の頭に乗せると、撫でて、髪を梳いてくれる。

「……俺は、君に感謝してる」

不意に青年が言った。

「君が来てくれて、教えてくれて、良かったと思う。ありがとな……」

青年は私をギュッと抱きしめる。身体は震えていた。

耳元で青年の嗚咽が漏れて聞こえる。

支えてあげたいと思う。でも、私じゃダメだ。死神の私には、ただ黙って抱かれていることしかできない。

青年の涙が流れ、私の肩に落ちる。死ぬ間際でも、それはやっぱり温かくて。どうしようもなく愛おしくて。

泣いているのに、震えているのに、それでも青年は優しく私の頭を撫でていてくれた。

どれほどの時間が経ったのだろうか。

青年の嗚咽は止み、私を撫でていた手も止まっていた。身体に温もりは残っていない。

それでも私は抱かれたままで。いつまでも抱かれたままで。

涙が溢れてくる。今までいくらでも人の死を見てきたはずなのに、私は青年の死に涙している。

凍っていた死神の心は、青年の温もりで溶かされてしまった……。

涙は止まらない、止まってくれない。

泣いたのはこれが初めてだった。

霞む視界で空を仰ぐ。

朝日はまだ昇らない。

今日は、曇りだ。

結（後書き）

書き直しただけの作品に付き合っていた方、本当にありがとうございます。

この作品を読んで、何かひとつでも心に響くものがあれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9173m/>

小さな死神の初恋（改）

2010年12月2日14時40分発行